

発話意図と文末形式のインターフェース —現代日本語における話し方スタイルの交替現象—

川岸 貴子* 安武 知子**

*中京大学非常勤講師

**日本語教育講座

Interface between Communicative Intention and Sentence-ending Form: The Case of Speech Style Alternation in Present-day Japanese

Takako KAWAGISHI* and Tomoko YASUTAKE**

*Part-time Lecturer, Chukyo University, 101-2 Yagoto Honmachi, Showa-ku, Nagoya 466-8666, Japan

**Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Abstract

Sentences produced by a speaker in communicative discourse have an amalgam of different types of elements. Besides grammatical elements and lexical items, which carry semantic content, there is a set of linguistic forms whose principal function is to make utterances appropriate to the speech situation. The speech style alternation in Japanese is one of the areas where this function is ostensibly manifested.

This paper examines various samples of naturally occurring discourse, spoken or written in essay-style present-day Japanese, and points out the discourse functions of different sentence-ending forms and the way they are sometimes intermingled in one stretch of discourse. The phenomenon of speech style alternation in Japanese is discussed here as the interface between the speaker's communicative intention and his/her choice of sentence-ending forms.

1. はじめに

言語を用いたコミュニケーションの場面において、話し手が発する文には、通常、さまざまな異なったタイプの要素が混在している。すなわち、文法要素や意味内容を伝える語彙項目に加え、発話を状況に合わせるといった語用論的機能を持った要素も存在する。

本稿では、日本語における発話スタイル交替現象を取り上げ、その談話機能を考察する。最初に、日本語の発話の種類について考える。次に、随筆や漫画等の会話を分析し、「ダ」形と「デス・マス」形の違いを考察する。さらに、「のだ」形と話しことばの中で撥音便化された「んだ」形とを比較し、両者の談話機能の違いを指摘する。

2. 発話の種類

Clark and Clark (1977)によると、発話の流れとは、話し手が聞き手の心理状態をどのように変えたいかに

従って談話計画を立て、その談話に適したメッセージをもった文を算出し、語彙構成素である語句を決め、調音プログラムを立て、最後にその調音プログラムの内容を実行するプロセスである。しかし、この計画と実行の区別は明確なものではなく、どんな場合でも話し手は計画と実行の両方を同時に少しずつ行っているのが普通である。実際に、このような複雑な過程を経て行われるため、予期せぬ言い間違いや口ごもり等も生じる。

しかしながら、ことばは、常に、発話と結びついている訳ではない。人はことばを用いてものを考えるのであり、発話しようとしていないのに、ことばを発してしまうこともある。本節では、他者との関わりという観点から発話を考察し、日本語の発話スタイルの分析を行う。

2.1 独り言

次の会話は、独り言 (monologue) を巡って交わさ

れている¹。

- (1)「この頃 独り言言うようになっちゃって」
「ひとりだどついね…」

独り言とは、他者が存在しない場面での発話を指す。一人暮らしでなくても、テレビでスポーツ観戦中、つい興奮して「やった！」などと叫んでしまうこともあり、思考の過程や思い付きをそのまま口にしてしまう場合も多い。

独り言には大きく分けて2種類ある。一つは、心の中で思ったり感じたりしたことば（内的発話 inner speech）が、興奮や驚きなど心理状態の影響で無意識に音声化されたものであり、驚いたときに思わず叫び声を上げてしまうのと同様の自然発生的なものである。瞬間的ではない内的発話であっても、ふと何かを思いついたり、外的世界の変化に気づくなど、何らかの心的変化がきっかけとなっていると考えられる。

もう一つは、意識的に声を出して言う場合で、病院で薬品や器具などを声を出して確認したり、自分に気合を入れたりする場合等が挙げられる。ことばを音声化するという過程を経ることで、内的発話では得られない効果が出ると考えられる。

いずれも、「聞き手」を特に想定していない発話であるという点では一方的である。ただし、後者の場合、自分を聞き手としても想定しているという捉え方もできる。また、猫や観葉植物に話しかけるケースは、一見すれば独り言だが、話者からすれば相手のいる語りかけである。

2.2 擬似双方向的発話

聞き手はいるが、双方向的（interpersonal）ではない発話もある。けんかに負けて立ち去る際に発せられる捨て台詞は、明らかにけんか相手に向けられた発話ではあるが、返答を求めているわけではない。愚痴は、相手に助言を求める「相談」と違い、一方的である。捨て台詞とは違って、聞き手に対し信頼はあるものの、期待しているのは適度な相づちや共感であって、解決策の提案ではない²。

「今日は寒いですね」「ええ、本当に寒いですね」といったやり取りは、会話であるが問題解決を目指したコミュニケーションとは異なる。情報を伝えているのではなく、共感・好意・社交的雰囲気を作り出すための会話（phatic communion）³である。日本では伝統的に、「公共の場」対「プライベートな場」ではなく、「ソト」対「ウチ」で社会的距離を捉え、聞き手とのかかわりを優先させる場合が多い。コミュニケーションではない擬似双方向的発話が頻繁に行われるのも、日本人が親和を優先する傾向の現れであると考えられる。

2.3 コミュニケーション

コミュニケーションとは、一般に「双方向的な会話のやりとり」と解釈される場合が多い。しかし、Leech（1983）は、「語用論への私自身のアプローチは、コミュニケーションとは問題解決の過程であるというテーゼによるものである」と述べている。また、Clark and Clark（1977）は「話すことは聞くことの裏返しにすぎないという、誤った考えにおちいりやすい」と指摘し、「話し手は聞き手に影響を与えようとする意図から始め、その意図が発話の計画へと変っていくのであり、逆に聞き手は話し手の計画を理解し、その意図を推断する」（藤永他訳：1986: 276）としている。

聞き手の何らかの反応を狙って発話する話し手と、その内容を聞いて話し手の意図を推し量ろうとする聞き手が存在することにより、コミュニケーションは成立する。

2.4 発話のタイプ

発話のタイプの違いは、下図のように座標軸を用いて示すことができる。

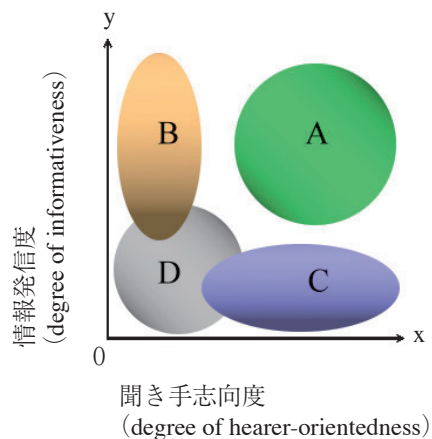


図1 発話の座標軸

図1では、x軸が聞き手志向度、y軸が情報発信度を示す。コミュニケーションを積極的に図っている場合は、（言い合いなどネガティブなやりとりも含め）聞き手志向度も情報発信度も高いので、座標点の値はx、yとも大きくなる（領域A）。解説など聞き手がわかっているかどうかのみがわかればよい状況での発話は、聞き手志向度はさほど高くない（xの値は小さい）が、情報発信度は高い（yの値は大きい）ため、座標点は領域Bに位置する。2.2にあるような「寒いですね」のやりとりや、相手の話は聞いてはいるものの、話し手に対し（英語のYESではなく単なる相づちとしての）「うん」程度で自己の考えや問題解決策をフィードバックしない状況では、聞き手志向度は高いが情報発信度が低いため、x軸寄りに位置する（領域C）。自然発生的な独り言や捨てセリフは、聞き手志向度も情報発信度も低いため、原点に近くなる。（領域D）。これら

の領域には実際には明確な境界線はなくグラデーションを成している。

ここで肝要なのは、文が同一であっても、話し手のスタンスを表す座標点が発話ごとに異なるという点である。例えば、大雨が降っているのを見て「本当にいい天気だね」と発話する場合、それが天気予報を信じて予定を決めた相手に対するユーモアや軽い抗議であれば、座標点は x 、 y とも値の高い領域 A に位置するが、予定通りに物事が進まないためむしゃくしゃし、何か言わずにはいられなくて発話した場合は、領域 D に位置することになる。

Yasutake (2010) は、英語話者と日本語話者との間には、発話する際、日常的にパブリックシーンであることを意識しているかどうかという点に違いがあると指摘している。「寒いですね」に類する発話は、日本においては聞き手に対する語りかけであり、聞き手志向度は保たれるが、聞き手に対し特に情報を発信しているわけではないため、(領域 D ではなく) 領域 C に位置する。英語話者の場合は、人前で (in public) 発話する場合は聞き手に何らかの対応を期待している。同じ発話が「コートを貸して欲しい」「窓を閉めてほしい」といった問題解決の提示を期待している (領域 A) と解釈される。言語の違いによって、コミュニケーションの破綻が生じるケースといえる。

3. 「ダ」形と「デス・マス」形

日本語には「ダ」形と「デス・マス」形の2種類の文末形式がある。「ダ」形は英語の原形に対応する。一般には、「ダ」形は普通の表現であり、「デス・マス」形は丁寧であるとされている。

- (2) a. 毎日2時間は勉強する。(「ダ」形)
 b. 毎日2時間は勉強するよ。(「ダ」形+終助詞)
 c. 毎日2時間は勉強します。(「デス・マス」形)
 d. 毎日2時間は勉強しますよ。(「デス・マス」形+終助詞)

本節ではまず、終助詞を伴わない「ダ」形が、英語の原形のように付加的な意味を持たないニュートラルなものなのかどうかについて考察する。その上で、「デス・マス」形表現との違いを探る。なお、終助詞の意味については本稿では扱わない。

3.1 「ダ」形の意味

英語の現在時制の用法は、日本語における「ダ」形の使用と似通っている。以下は安井 (1982: 69-71) で紹介されている現在時制の文の一部である。

- (3) a. There goes my hat! (眼前の動作)
 ああ、私の帽子が飛んで行く。

- b. Our school stands on a hill. (現在の状態)
 我々の学校は丘の上にある。
 c. He comes on time, and never breaks his word. (現在の習慣的行為)
 彼は時刻どおりに来て、決して約束を破らない。
 d. The dogs barks at strangers. (習性)
 犬は見知らぬ人にほえるものである。
 e. The earth moves around the sun. (真理・通念)
 太陽は地球のまわりを回転する。
 f. Father goes to New York tomorrow. (確定的と考えられる未来の事項)
 父は明日ニューヨークへ行く。
 g. If it is not rainy, I will go. (時や条件を表す副詞節における未来の事柄)
 もし雨でないなら、行こう。

これらの文に共通するのは、いずれも「事実である」という認識の下に発話される点にある。眼前の動作や未来を表すのに、進行形や未来表現を取って使わない場合は、話者がその内容を (実際はどうであれ) 「客観的な事実」として認識していることになる。

「事実」の羅列であるいわゆる歴史的現在 (historic(al) present) や、芝居の中での事実を書き表したト書きにも「ダ」形を用いる。このどちらの用法も「眼前の動作」と密接な繋がりがあがる。

- (4) Caesar leaves Gaul, crosses the Rubicon, and enters Italy. (歴史的現在)
 シーザーはゴールを出発、ルビコン川を渡り、イタリアに入る。
 (5) Mary goes out and John follows her. (芝居のト書き)
 メアリーが出てゆき、ジョンがその後を追う。(安井 1982:69)

英語の未来表現に対応する日本語も「ダ」形で表現される。

- (6) I'm going to buy a new car tomorrow.
 明日新車を買う。

一方で、安井 (1982: 428) は、現在時制を使う例として挙げている以下の文に「デス・マス」形の訳をあてている。(7a) は野球の実況中継、(7b) は手品実演中のセリフである⁴。

- (7) a. Now he stands up. He takes up a bat, gives it a swing or two, and goes to the batter's box.
 今、彼は立ち上がり、バットを手に取り、一、二度バットを振り、バッターボックスへ進

んでおります。

- b. Look! I take this hat. I place it on the table. I cover it with a cloth. I take off the cloth. And I produce a pigeon!

さあよおく見てください。この帽子をとり
ます。それをテーブルの上に置きます。そ
れを布でかぶせます。そしてその布を取り
払います。ほうら鳩が出てきました。

(安井 1982: 428)

ここでの「デス・マス」形の使用は、視聴者や聴衆を意識していることの表れである。このように、「デス・マス」形を使うか「ダ」形を使うかにより、話し手が聞き手に対してどういう意識を持っているかを演出できるのである。

以下の例にみるように、「ダ」形では、話し手の感情や言外の意味を伝えるといった語用論的要素は排除され、客観的に事実を記している、という印象を聞き手に与える。(下線による強調は筆者による。以下同様である。)

- (8) 人脈マップを作るなら、若いうちに限る。(酒巻久『朝イチでメールは読みな!—仕事ができる人になる41の習慣』p.127)
- (9) 語用論は言語の構造が現実のコミュニケーションにおいて用いられるときにどのような現象が起こるかを検討し、一般原則を求める。
(西光義弘編『日英語対照による英語学概論増補版』p.244)
- (10) もともとハムエッグは、ハムと卵を組み合わせ
て熱を加えただけのものだ。
ハムそのものも実に平凡な素材だし、卵に
至っては平凡そのものだ。
だが、その二つを組み合わせ、熱を加えた
たん魅力的な食べ物に変貌する。
(東海林さだお『タスキの丸かじり』p.131)

「ダ」形は、ときに、ぶっきらぼうではあるが、客観性がアピールできる文体である。

3.2 「デス・マス」形の意味

「デス・マス」形は、聞き手を意識した文体である。近年、書店で新刊や新書を手に取ると、「デス・マス」形を用いた書物が増えているのが目につく。例えば、次の(11)では、すべての文が「デス・マス」形をとっている。

- (11) あなたが仕事などでパワポを使ってプレゼンテーションをするときには、まずは発表用の原稿を書くことでしょう。それをもとに、パワポ

の図を作りますね。

これで発表の本番に臨んでしまう人が多いのですが、これで終わりではないのです。パワポの内容に即して、説明の原稿を書きなおすのです。

(池上彰『わかりやすく〈伝える〉技術』pp.90-91)

注目されるのは、(11)が、二人称(読者)を表すことばを「あなた」と表現するなど、読み手一人ひとりを意識した語りかけ文になっていることである。この「あなた」を「皆さん」に変えるだけで、そのまま講演会を聞いているのと同じような印象を与える。2.4の図1で見ると、相手への語りかけがある分、聞き手志向度を示すxの値は大きくなる。「デス」「マス」を首尾一貫して使っていることによってこの効果は保たれる。

3.3 会話スタイルとポライトネス

聞き手志向のコミュニケーションは、ポライトネスと密接なかかわりがある。しかし、ポライトネスを考える場合、「丁寧さ」と捉えると、意味を取り違えることになる。周知のように、日本語では、「ダ」形を普通の文体、「デス・マス」形を丁寧な文体、と説明されている場合が多い。しかしながら、実際の場面では、丁寧な言葉づかいがその場面にふさわしいとは限らない。次の会話をみてみよう。

- (12) 三田：あの——
杉坂：は？
三田：え——・・・・・・・・・・・・・・・・
~~~~~  
杉坂：・・・・・・・・・・・・・・・・三田先生<sup>わたくし</sup>の名前でしたら杉坂でございますが  
(森本梢子『研修医 なな子 4』p.77)

杉坂の最後の台詞は一人称に「わたくし」というルビが振ってあり、文末表現も非常に丁寧である。しかし、聞き手である三田は杉坂の同僚でひとつ年長に過ぎず、他の場面では「デゴザイマス」形は用いていない。名前を忘れられたことを暗に抗議した典型的なアイロニーである。丁寧な表現を用いても、聞き手に対する態度が丁寧であるとは限らない。

Longman Dictionary of Contemporary Englishによると、ポライトネスの形容詞 polite の意味は「自分が関わっている会話場面にふさわしい適切な言動をとり、他人の欲求や感情に対し慎重な配慮を示すこと」とある。「デス・マス」形を用いることと他者への配慮を示すポライトネスとは連動するものではない<sup>5</sup>。



### 3.4 スタイルの使い分け

ここでは、「デス・マス」形と「ダ」形の混在文に焦点を当てる。通常のケースでは、読み手への語りかけになる冒頭やまとめの部分では「デス・マス」形を用い、解説などでは「ダ」形を用いることが多い。

- (13) 安くてうまいB級ご当地グルメの祭典「B-1グランプリ」の季節がやってきました。

(中略)

『日経トレンディ』によると、B級ご当地グルメには、昔から地元で食べられている「発掘型」と新たに考案された「開発型」があるが、「開発型」はメディアへの露出が減る2年目以降の持続がむずかしく「平均寿命は3年」といわれているそうだ。

(中略)

一方、B級ならぬD級グルメという言葉もあります。D級のDは「デカ盛り」ではなく、「井(ご当地井)」の頭文字だそうです。ちょっと強引かも。

(荻原魚雷「そのほかのニュース『B級グルメを食い尽くせ』」毎日新聞)

ただし、文の途中に「デス・マス」形を混在させる例もある。

- (14) だがこっちにも言い分があって、寝ている間に僕のいびきを妻が携帯電話で録音したのだが、再生してみるとなぜかまったく入っていなかった。理由は分からないが(周波数が合わなかったのか?), だから僕はまだ自分のいびきを聞いたことがないのだ。一度聞いてみたいと思っていたら、この度、いびきを録音するための枕が売られていることが判明しました。これほど使い道がピンポイントなグッズも珍しい。計り知れない「いびき業界」である。

(三谷幸喜『三谷幸喜のありふれた生活6 役者気取り』p.56)

(13)(14)の例は、最近コラムなどで見られる文体で、時折、読み手を意識して書いていることを「デス・マス」形で表現を使うことによってアピールし、内容については事実をありのまま語っていることが伝わる「ダ」形を用いている、いわば混在型スタイルである。

次は、「デス・マス」形の素の文に「ダ」形が含まれる例である。

- (15) スヌーピーというのは、ほんとにのんき者で、なんにも怖いものがないみたいな感じなんですけど、唯一、ネコが怖いんですよね。

最初にネコと会ったときなんかは、けっこう大丈夫だったんだけど、だんだんだんだんネコが怖くなって行って、いまや、ネコはもう登場しないんですね。登場したら、スヌーピーがパニックに陥っちゃうんじゃないかと思う。

隣のうちのネコというのは、いつでもギャツと爪で引っかくだけで、ネコそのものは登場しなくなったんです。一時、ファーロンというネコがいたんですけどね。スヌーピーにも一つくらい怖いものがあるというのは、とてもいいなあと思います。

(河合隼雄+谷川俊太郎『落ちこぼれ、バンザイ! スヌーピーたちに学ぶ知恵』pp.233-4)

この例は、「ですよ」に見られるように終助詞を使い、聞き手/読み手を意識した「デス・マス」形の話しことばで語られているが、下線部の「思う」のところだけが「ダ」形で文が終わっている。このような混在型の文章には、語りかけの中で、ときどき読者との距離を狭くし、ある種の臨場感を与える効果がある。

文字媒体でこの文体がみられることは興味深い。話しことばと違い、特に編集者のチェックも入る出版物は推敲されたものであり、そこに「ダ」形と「デス・マス」形という2つの文体が混在していることは、ことばが現実には多様なモードで使われていることを示唆している。

## 4. 「のだ」形

日本語で多用される「のだ」形については、多くの研究が既になされてきている。本章では、文体の違いに焦点を当てながら「のだ」形の特性を探り、今まで多くの日本語文法書で一括りで説明されてきた「のだ」、「んだ」、「のです」の違いについても考察する。

### 4.1 「のだ」のコアな意味

安武(1991)は、「の節 (no clause)」の役割を名詞句化 (nominalization) であるとし、(必ずしも客観的な事実ではないがとにかく) 話者にとっては既存情報であることを示すものであると論じている。

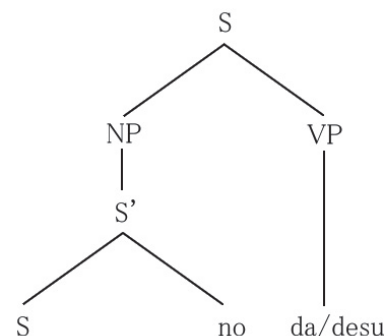


図2 「のだ」の構造

この構造 [NP[S' S no] [VP da/ desu]] では、Sが「の節 (no clause)」として名詞化し、それに動詞 da/ desu が後続するというメカニズムが明示されている。すなわち、「のだ」形といっても実際にはまとまった構成素 (constituent) を成していないのである。

「のだ」は、Sを名詞化することで、その内容が事実であるということを示すだけの「ダ」形から一步踏み込んで、Sが客観的な事実であることを話し手が聞き手に断言している点に特徴がある。そのため、「のだ」は「実は」と共起することが多く、まとめや結論を述べる場合によく使われる。以下では、図2と結びついた意味構造を前提とし、文末形式によって文の意味が変わるかどうかを検証する。

#### 4.2 「のだ」と「んだ」

庵 (2001) は、「のだ」における「関連づけ」の役割の項で、以下の例を挙げている。

##### (16) 理由説明

- a. 昨日は学校を休みました。熱があったんです。  
b. 帰りにびしょぬれになりました。急に大雨になったんです。

##### (17) 言い換え

- a. 昨日大学を卒業した。今日からは学生ではないのだ。  
b. 先日初めてパスポートを取った。これまで海外に行ったことがなかったのだ。

##### (18) 状況に対する話者の解釈

- a. (朝、道が濡れているのを見て) 昨夜雨が降ったんだ。  
b. (デパートで泣いている子供を見て) きっと迷子になったんだ。

##### (19) 発見

- a. なるほど、このボタンを押すんだ。  
b. このコンビ、おもしろいんだ。  
c. あの人、頭がいいんだ。  
d. この傘、こんなところにあつたんだ。

(庵 2001: 244-5)

一般に、「ん」は「の」の話しことばとしての形として捉えられており、同じカテゴリーの中で説明されている<sup>6</sup>。しかし、発見を表すとされる用法は、殆どのテキストで「のだ」ではなく「んだ」の例を挙げて説明されている。これらの例を、仮に「のだ」に置き換えてみよう。

- (19) a'.? なるほど、このボタンを押すのだ。  
b'.? このコンビ、おもしろいのだ。  
c'.? あの人、頭がいいのだ。

d'.? この傘、こんなところにあつたのだ。

(19a)-(19d) と比べ、(19a')-(19d') が不自然であるのは、これらの例がすべて話しことばであるため、という説明が考えられるが、それならば書きことばの例がなぜ挙げられていないのか、という新たな疑問が生じる。

次の例をみてみよう。

(20) 五代: おまえねー、やっぱり泊まり込みなんていきすぎだと思わないか?

晶: どおして。

五代: 仮にも男と女だよ、われわれは。

晶: それがなんなのよ。

あっそーか、裕ちゃん 恥ずかしーんだ。

ばっかねー 今さら……

昔はよく一緒にお風呂はいったじゃない。

五代: あんなー……

(高橋留美子『めぞん一刻 5』pp.116-7)

ここでの「んだ」は、「あっそーか」というセリフに続いて発話されていることからわかるように、自分が発見したことを相手に伝えるため「だけ」に発せられたのではなく、自然発生的に口から出たものである。

この例を他の文体と比較してみよう。

- (21) a. ああ、そうか、裕ちゃん 恥ずかしいんだ。  
b. ?? ああ、そうか、裕ちゃん 恥ずかしいのだ。  
c. ?? ああ、そうか、裕作さん 恥ずかしいのです。  
d. ああ、そうか、裕作さん 恥ずかしいのですね。

(20) の本文下線部とほぼ同じである (21a) と比べると、「のだ」を使った (21b) と「デス・マス」形を使った (21c) は不自然な印象を受ける。(21d) では、不自然さはなくなるが、終助詞「ね」がつくことで相手に対する確認するニュアンスが付加され、意味が変化している。

ここで、以下の会話における「んだ」文の位置づけをみてみよう。

(22) 克郎: 御船誠吾氏の彼女、安堂佳乃嬢も藤田六段について修行したんだ

竜: じゃあ映って子と同門なんですね

克郎: そのはずだよ。会川鉄道の方から藤田さんに相談を持ちかけたらしい。剣舞はも

ととも剣の型からはじまっている。戦う剣だけでなく舞う剣も心得ているのさ。イベントの主演に安堂嬢はどうかと、会川鉄道は持ちかけたそうだ

竜：有名なんですね、その人

克郎：去年の全国高校剣道大会で優勝してるんだ。ちょっとした名士でね、勤めはじめた土産物屋に、彼女目当てで地元客がやってくるそうだ。御船誠吾氏が見初めたのも、その大会会場だったから

竜：あ、誠吾って人も剣道が好きなんだ

(辻真先『会津・リゾート列車殺人号』p.62)

高校生の「竜」は、親しい相手ではあるが年長である「克郎」に対し、「デス・マス」形を用いている。ところが、下線部を比較すると、3つめの「好きなんだ」だけは「ダ」形になっており、聞き手志向度が低くなっている。これは、相手の発話内容から得た自分の気づきをそのまま口にした発話であり、発信された情報もそのことに気づいたということのみである。したがって、図1の領域Aよりも原点寄りの領域Dに発話の座標点が位置するものと考えられる。

以上から、「んだ」には、聞き手を必ずしも意識せず、自分の気づきを素直に口に出して表現する機能があることがわかる。「んだ」は、元来、「のだ」を言いやすくしたいわば会話体であるが、書きことばとしてではなく話しことばでのみ使われてきた過程で、独自の用法が発達したものと考えられる。

(22)の用法では、「の節」のもつ「既存性」の対象となる内容が直前の相手のセリフ中にあり、それを言い換えた後で名詞化し、自分に向けて繰り返していると考えられる。なお、この用法を利用し、相手に対し、聞き手を意識しながらも敢えて独り言のように見せる例もある。以下は看護師の星野と医師の五島が夜の海岸で二人きりで話すシーンである。

(23)星野：父にも話したんです。鳥を出たいって。

そしたら、今まで好き勝手にやってきたのは自分のほうだから、私の好きに生きろって。お義母さんの面倒見るのは、自分の役目だから心配するなって。

五島：ほくも、星野さんの好きなように生きるべきだと思う。

星野：(うつむいて五島に背中を向けて)

なあんだ・・・

結局、誰も引き留めてくれないんだ。

五島：え

星野：自分から言い出しておいて変ですけど、もう少し必要とされてるかと思った・・・

五島：そうじゃないよ。星野さんの替わりなんてどこにもいない・・・

でも星野さんが決めたことだから、もう決意は固まっているでしょ。(中略)

星野：そうじゃなくて・・・

(向き直って)

先生は・・・

五島健助はどうなんですか。

(山田貴敏『Dr. コトー診療所 19』pp.123-5)

この漫画では通常、星野は五島に対し「デス・マス」形で話す。しかし、発見を示す「なあんだ」に続くセリフは「んだ」で終わっており、(21)、(22)と共通している。ただし、この例では、気づいたことが即口をついて出たわけではないことを示す「聞」が、このセリフの前に星野がうつむく一コマを挿入することで表現されている。

ここで、文中にある「自分から・・・」のセリフに着目すると、前半は「変ですけど」と「デス・マス」を用い明らかに聞き手志向であるが、後半では敢えて「ダ」形を用い、聞き手に何かを伝えようとするのではなく、あくまで本音を漏らしているだけという印象を与えている。星野が「ダ」形を用いる際は五島から視線を外し背を向けて発話している点もこのことを裏付けている。「んだ」形の文も同様であり、聞き手志向の「デス・マス」形を用いて、一方向的発話スタイルを用いることにより、自分から鳥を出ると言っておきながら賛成してくれた五島に対しストレートに失望を伝えるのを回避し、ポライトネス違反を免れている。(相手の反応に対する失望の表明や抗議の意図があるにせよ)「ダ」形を用いることで発話が聞き手志向ではないように「演出」できることを示す例である。

逆に、「のだ」が「んだ」と交替できない場合もある。次の漫画の例をみてみよう。

(24)八神：あんたのせいだからね飛鳥

飛鳥：・・・

八神：きっと蕨さん すごく傷ついたと思う

たまに面白くない事があったからって

級友に八つ当たりしないよねっ！

人の傷を治す立場を目指そうって人間が

反対に人を傷つけてどーするんだ

医者に向かないって言われて当然だよ

あんたの親の判断は正しい!!

小此木：そーだ そーだ 蕨さんはサル頭じゃ

ないぞっ

わかんない事はすぐに質問しに来るし真

面目で向上心もあるし 熱心に頑張っ

ていると僕は思う

飛鳥：～～～

[作者のナレーション] そーなのだ

藤さんだって決して怠けているわけでは  
 ないのだ  
 優秀なクラスメート達に何とか付いて行  
 こうと 少しでも追いつきたいと  
 一生懸命勉強しているんだけどさ  
 努力がなかなか結果に結びつかないだけ  
 なのだ  
 そーゆー事ってよくあるよね

(川原泉『レナード現象には理由がある』pp.25-26)

一般に、作者の視点で語られるナレーションは、漫画においても、通常、登場人物の会話より文体が堅い。しかし、この例の場合、その理由で「のだ」を使っているとは考えにくい。「そー」という表記自体がそもそもフォーマルではないからである。この例における「のだ」は、ナレーションの前に繰り上げられた会話を受けて、まとめとして使われたものである。下線部を、「そーなんだ」とすると、直前の会話から作者が何かを発見したような印象を与える。登場人物の独白的なナレーションの場合にはありうることであるが、作者のナレーションとしては不自然である。

## 4.3 「んだ」と「んです」・「のです」

以上見てきたように、「んだ」と「のだ」には談話機能上明らかに違いがある。次に、「んです」と「のです」の場合はどうかというと、どちらも「デス・マス」形であり、「聞き手志向」である。したがって、名詞化文のSが自分に向けた自然発生的発話となることはない。

公共性の高い演説や宣言等は別として、通常の会話の中で「のです」が使われることは殆どない。その意味で、話しことばとしてよく使われる「のです」と「んです」は異なる。座標としては、「んです」は「のです」に比べ、(聞き手ではなく)やや話者志向寄りに位置する。

## 4.4 まとめ

「のだ」・「んだ」・「のです」・「んです」は、「のだ」として一括して論じられることが多かったが、先行する発話内容を受けて、「発見」の意味で発話される機能は「んだ」特有であり、「のだ」にはないことがわかった。また、「デス・マス」形の場合は、常に聞き手を意識して用いられるため、そのような機能ももたない。

## 5. おわりに

本稿では、発話を、聞き手志向度と情報発信度の観点から分類することを提案し、その上で、「ダ」形と「デス・マス」形に着目して、この二者が聞き手の存在を意識しているかどうかという点で異なっていることを

論じた。さらに、「のだ」の撥音便化した形である「んだ」が、実際の会話において、聞き手志向度の低い、話し手自身の「気づき」を表現する独特の機能を持つことを論じた。

日本語の文末形式は、聞き手に配慮しているかどうかで、distal/direct, polite/plain, careful/casual, といった対比で論じられることが多い。しかしながら、発話の状況は聞き手の有無で決まるわけではなく、話し相手がいる場合であっても思いついたことをつい声を出して言うてしまう内的志向の音声化などの場合、ポライトな表現を用いられることはない。一方、独り言であっても、自問自答の場合、終助詞を使って自分に語りかけをする場合もある。

発話の際には、話しながら聞き、考え、その中でさらに周りの状況等の要素も関わるため、話すときのモードも刻一刻と変化する。話し手は終助詞や文末スタイルによって意識的あるいは無意識に発話態度も同時に発信し、聞き手はそれらを手がかりに相手の意図を判断する。こういった共同作業の繰り返しがコミュニケーションなのである。

## 註

1. 毎日新聞 2010年9月4日(土)夕刊 4版 7面『ウチの場合』森下裕美(2387)より引用。
2. 毎日新聞「特集ワイド」では「愚痴聞きビジネス」と題し、最近の「よろず相談」の傾向として、助言を求めず単に愚痴を聞いて欲しくて電話してくるケースが増えていること、しかも、「黙って聞いて!」と相づちさえもいやがるケースもあることなどを紹介している。  
なお、Tannen(1990)は、愚痴を言う女が共感を求めているのに対し、男が解決策を提示するという男女のすれ違いの例を紹介している。
3. 情報の伝達というより、社会的雰囲気を作るために言語を用いること。沈黙のぎこちなさを避けるために用いる挨拶のことばや決まり文句など。B. Malinowski(1923)の造語。
4. 英語では、料理番組での手順説明にも現在形が使われる。料理のレシピ集では、日本語では主として「ダ」形を、英語では命令形を用いる。紙面節約と、手順説明において余計な要素が入るのが紛らわしいためと考えられる。
5. ポライトネスには、FTA(Face Threatening Act)等の概念と関わって、話し手・聞き手の距離や力関係、その場の状況だけでなく、文化の違い等の要因も含まれる。
6. (18)の「状況に対する話者の解釈」の例文も「んだ」と「のだ」の交替が起こりにくい。道が濡れていれば雨が降ったこと、子どもがデパートなどで一人で泣いていれば迷子であることが、それぞれ容易に察しがつくからである。むしろ「気づき」の一種であり、(19)同様、コミュニケーションな文ではないという分析の方が的を得ていると考える。

## 参考文献

- Clark, Herbert H. and Eve V. Clark. (1977) *Psychology and Language: An Introduction to Psycholinguistics*. New York: Harcourt Brace Javanovich. (藤永 保・小菅京子・酒井たか子・



- 秦野悦子 (訳) (1986) 『心理言語学—心とことばの研究上』 東京:新曜社.)
- 日置 貴子 (1989) 「アイロニーの発話行為論」『CLARITAS 5』愛知教育大学大学院英語研究会.
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000a) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』松岡 弘監修 東京:スリーエーネットワーク.
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000b) 『中・上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』白川博之監修 東京:スリーエーネットワーク.
- 庵 功雄 (2001) 『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える』東京:スリーエーネットワーク.
- 井田 純 (2010) 「特集ワイド『隆盛 愚痴聞きビジネス』」『毎日新聞』2010年9月2日付夕刊 2 (2).
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』東京:大修館書店.
- Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作 (訳) (1987) 『語用論』東京:紀伊国屋書店.)
- Malinowski, B. (1923) "The problem of meaning in primitive languages." In Ogden, C.K. and I.A. Richards (eds.) *The Meaning of Meaning* (suppl. 1). New York: Harcourt Brace.
- Maynard, S.K. (1993) *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese language*. Amsterdam: John Benjamins.
- McGloin, N. H. and H. Terakura. (1978) "On the assertive predicate NO DESU in Japanese." *CLS* 14. 285-296.
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説』くろしお出版.
- 野田 春美 (1997) 『日本語研究叢書9「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 多湖 輝 (1972) 『言葉の心理作戦—その一言があなたの人生を左右する』東京:ごま書房.
- Tannen, Deborah. (1990) *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Morrow. (田丸美寿々 (訳) (2002) 『わかりあえる理由 わかりあえない理由—男と女が傷つけあわないための口のきき方8章』講談社+α文庫 東京:講談社.)
- 田野村忠温 (1990) 『現代日本語の文法I—「のだ」の意味と用法』IZUMI BOOKS 7 大阪:和泉書院.
- 安井 稔 (1982) 『英文法総覧』東京:開拓社.
- 安武 知子 (1991) 「補文命題の既存性と説明」『現代英語学の歩み』安井稔博士古稀記念論文集編集委員会 東京:開拓社.
- 安武 知子 (2008) 『言語現象とことばのメカニズム—日英語対照研究への機能論的アプローチ』開拓社叢書17 東京:開拓社.
- 安武 知子 (2009) 『コミュニケーションの英語学—話し手と聞き手の談話の世界』開拓社言語・文化選書13 東京:開拓社.
- Yasutake, Tomoko. (2010) "Communication and Style Shift in Japanese." 『愛知教育大学研究報告 59 (人文・科学社会編)』7-14.
- 川原 泉 (2006) 『レナード現象には理由がある』ジェッツコミックス 東京:白泉社.
- 三谷 幸喜 (2008) 『三谷幸喜のありふれた生活6 役者気取り』東京:朝日新聞社.
- 森本 梢子 (2000) 『研修医 なな子 4』YOU 漫画文庫 東京:集英社.
- 森下 裕美 (2010) 『ウチの場合は』(2387) 『毎日新聞』2010年9月4日付夕刊4 (7).
- 西光 義光 (編) 『日英語対照による英語学概論 増補版』東京:くろしお出版.
- 荻原 魚雷 「そのほかのニュース『B級グルメを食い尽くせ!』」『毎日新聞』2010年9月8日付夕刊2 (5).
- 酒巻 久 (2010) 『朝イチでメールは読むな!—仕事ができる人になる41の習慣』朝日新書 東京:朝日新聞出版.
- 東海林さだお (2004) 『タヌキの丸かじり』文春文庫 東京:文藝春秋.
- 高橋留美子 (1997) 『めぞん一刻 5』小学館文庫 東京:小学館.
- 辻 真先 (2010) 『会津・リゾート列車殺人号』光文社文庫 東京:光文社.
- 安井 稔 (1982) 『英文法総覧』東京:開拓社.
- 山田 貴敏 (2006) 『Dr. コトロー診療所 19』ヤングサンデーコミックス 東京:小学館.

(2010年9月17日受理)

## 用例の出典

- 池上 彰 (2009) 『わかりやすく〈伝える〉技術』講談社現代新書2003 東京:講談社.
- 河合隼雄・谷川俊太郎 (2009) 『落ちこぼれ, バンザイ!—スノーピーターたちに学ぶ知恵』講談社+α文庫 東京:講談社.